



## トラウマ臨床の 具体的な工夫が 豊富に盛り込まれた1冊

評者 **福田正人**  
群馬大学大学院教授・神経精神医学



## 大人のトラウマを 診るということ

こころの病の背景にある  
傷みに気づく

青木省三、村上伸治、鷲田健二＝編

定価：3,300円  
A5・224頁／医学書院／2021  
[ISBN978-4-260-04577-3]

「200頁以上の症例集部分は退屈するのでは」、そうした予想はすぐに裏切られた。「ああ、やはりこう考えていいんだ」、読みながら繰り返しそう思い、「どのくらいの精神科医が同じように考えるだろうか」、読み終えた今そう考えている――。

こう書いたのは、6年前の『大人の発達障害を診るということ』（医学書院、2015）の書評であった。今、同じことを、トラウマについて感じている。「トラウマをそこまで拾い上げて診るのだ」と感じた箇所がいくつもあった。それは、「日々の臨床は、発達障害やトラウマを考えずには行えないのではないか」というのが実感である」という、編者らの思いに基づいている。

異色なのは、あげられている症例である。症例集の30例と、編者3人の解説で紹介された23例には、トラウマの実在がはっきりしない症例がある。トラウマの詳細が明確でなかったり、ささやかなトラウマだったりすることがある。治療がうまくいかなかった場合や、すぐに中断となってしまった経過がある。症例集として思い浮かべる、典型例の成功体験とはほど遠い。しかしそれこそが、トラウマの臨床の大切な部分である。その具体的な支援や語り口からは、執筆者16名それぞれの経験や人柄がうかがわれる。

編者の姿勢は、はっきりしている。「多くの精神疾患の背景に、トラウマの要素が隠れており、それに気づかないと治療に難渋しやすく、それに気づくと、治療や支援が見えてくる」「患者の生活や人生に目を向けて話を聞く中で、それに気づき、苦労をねぎらい、適切な説明を行いつつ、時間をかけて回復を支援する治療が求められている」「この基本を専用技法よりも重視した本はまだ見たことがない」、そうした本を編もうとする試みの成果が本書である。

### 隠れたトラウマに気づくことで治療・支援が見えてくる

支援の経験から汲み上げられた具体的な工夫が、編者の解説の小見出しとしてあげられている。トラウマへの気づきについては、「何か恐いことがあったのではないかと考えてみる」「トラウマの形について尋ねる」「トラウマ体験を話すか話さないかは患者の決めることである」。支援の基本については、『『保存的』『支持的』アプローチを基本とする』『穏やかな、平和な雰囲気大切となる』『治療や支援によるトラウマをできる限り作らない』。患者の振る舞いについては、「相談するということや、支援を受け入れるということが難しい」「診察医・医療機関を繰り返し変更することがある」。支援の視点については、「トラウマの延焼を防ぐ」「意味付けの修正」「生活を支援する」「作業療法が安心と安全を再び体験するきっかけになることがある」。

素朴な筆触の野菜の実が、表紙に描かれている。「植物は成長の途上に風雨に打たれ傷んだりしながらも、やがて実りのときを迎える。そのとき、実の傷はなかなか味わい深い」、そういうトラウマについての思いを表しているという。

1つだけ残念なのは、一般向けの書籍『ぼくらの「トラウマ」』（青木省三＝著、ちくまプリマー新書、2020）が遠慮がちにしか紹介されていないことである。受診までには至らないトラウマについて書かれたこの新書は、本症例集の考え方の基本を丁寧に述べたものである。タイトルの「ぼくらの」という言葉には、トラウマが多くの人に認められるという意味とともに、過酷な体験の社会における共有という意味が込められている。

どんな分野でも、本当に大切なことは、基本や常識や「当たり前」に忠実なことである。それがトラウマについても変わらないことを、思い出させてくれる本である。

